

造形美術と国際協力

—世界中にどこでもドア をつくる—

東京造形大学 教授 山田猛



地球が回っているのを感じる？

かつて、日本のODAを担当するJICA：国際協力機構の青年海外協力隊員として、南米パラグアイの国立教員養成校で、美術教育普及に従事したことがあります。島国の日本と違い、大陸にある多くの国々では、町と町の間は、見渡す限り地平線しか見えない広大な空間が広がっていますが、ある夕暮れ時、学生達と何気なく夕日を眺めていた時の事です。太陽がまさに地平線上に沈んでいこうとするその瞬間、彼らは、

「回った！」

と言うのです。「太陽が沈んだ」と思っている私とは違い、同じ夕日と一緒に眺めていながら、彼らは自分がのっている地球が回っていることを体感していたのでした。そのスケールの大きさ、開かれた五感とその感度の高さ、心の豊かさに、わかった気になっているだけのちっぽけな自分自身を痛感しました。駅に停車している車窓から、隣の電車が発車する際に、こちらが動いているかのような錯覚が起きることがありますが、彼らは錯覚ではなく、真実を観る目と心で、地球の自転をごく日常のこととして体感していたのでした。

「教えるより教えられる」というのは、教育の世界の常套句ではありますが、まさしくそのような日々の連続でした。美術教育を通して養うべき真善美を感じ取る目と心を、それまで美術教育を受けたことがない彼らが、普通に持っていたのでした。このことは、美術教育の本質を真剣に自問自答するきっかけとなり、今日に及んでいます。通常、左脳では地球の自転や公転を理解していても、右脳では陽は上り沈むとを感じるギャップがあるかと思われませんが、彼らの左脳と右脳は、均整の取れたバランス感覚を持っているのでした。わかった気になっているだけのことがどれほど多いかを痛感し、自らの五感の感度の低さを知ることとなり、それまで生きてきた価値観が大きく覆される日々の連続となりました。

リンゴが木から落ちるのを見て、万有引力を発見したと伝わるニュートンのように、心と身体で五感を最大限活用して感じ、深く思考できる人が、どの分野においても、ひとかどの人物になっているようです。AIには無い、感性のアンテナの高さと、その感度の良さこそが重要となる時代になっています。科学技術の進歩とともに人類が忘れ去ってきた原初の感覚を取り戻す必要があります。このような今日こそ、造形美術教育が大きく貢献する必要性を感じます。

国際協力というと、先進国が途上国を援助するという構図で理解される傾向があります。しかし、give & take が成立する関係性の中にこそ、成熟した相互協力ができ、むしろ我々が失ったり、忘れてしまっている大切なことに気づかされることの方が、遥かに多いことを体験を通して学びました。

それが世に必要ならきっと実現する

これまで、パラグアイ以外に、メキシコ、アルゼンチンの美大や美術館、香港日本人学校等、いくつかの国で働く機会に恵まれましたが、国際協力を通じて学んだことは、世にとって必要なことは実現できるということです。

例えば、ここに学校をつくる必要があるという場合に、その実現を望む多くの人々の力が集まってくる経験をしました。資金までも、税金を払う代わりに寄付をすることで、イメージアップを狙う企業に助けられたりすることもあります。お金持ちになりたい、有名になりたい等の個人的な願いに対して、力が

集まってくるとは思えませんが、世に必要なことは、多くの人々の願いとして実現の方向に動き出すものです。誰だって世の中が前に動く力になりたいし、誰かに喜んでもらうことが、何よりの自身の幸せや充実感に繋がるものです。

自分のやりたいことや夢の実現のためには、それと世の必要性や、誰かにとっての幸せと

を、どうリンクさせるかをデザインすることが大切であると考えます。造形美術教育を通して、人生や世界を繋げていくデザイン力を、育てていきたいものです。強い信念でそれを実行に移すことができれば、実現に向けてことが動き出すと信じられます。



パラグアイ エンカルナシオン市の学校

世界中にどこでもドアをつくる

テロや紛争が絶えない今日の国際社会において、多様性を受容する文化的成熟社会の構築が求められます。言葉や態度で主張を伝えると、争いや紛争、戦争に繋がりがやすいことは歴史が示しています。成熟した社会形成のため、互いの異文化理解のためのツールとして、造形美術は有効であろうと考えられます。違いを乗り越え、相互理解し合うためのツールとしての造形美術教育の普及は、今後の成熟した社会形成のために、その役割はもっと重要になるべきと考えます。

それぞれの民族や地域文化、バナキュラー文化を基にしたものが、造形的に表現されても、テロや戦争には繋がっていかないはずで。造形美術は、国・民族・言語・宗教・人種・時代等、あらゆる障壁を越えて、ダイレクトに本質を心に伝える人類共通言語としてのツールになり得ます。国際理解を通じた、相互に学び合う関係性の構築が望まれます。

今日の国際社会は、外敵を想定し、国民を煽るような言動で国をまとめようとする指導者やその支持者が増加し、国粹主義や排他的な危うさを感じられます。そのような状況にある今日こそ、多様性を認め合う、風通しの良い、文化的に成熟した国際社会が求められている時でしょう。

私自身は、造形美術教育の普及が、世界中に「どこでもドア」をつくることでもあると考え、国際協力にあたってきました。国際的コンクールやインターネットの普及で、作品の世界発信はかつてよ



スペイン語で絵文字を制作中のパラグアイの教員養成校学生

り容易になっています。多様性の世界に異文化へのドアをつくり、様々な人々が入ってこられる仕組みを作ることで、そのドアを開ける人や出入りする人がでてくるでしょう。世界中にできるだけ多くのドアをつくり、人々が自由に行き来できるようにすることが、我々美術教育関係者の務めと考えます。

子どもの心は柔らかく、本質を掴む力を持っています。彼らによって創られたドアが開けられ、国際社会の風通しが良くなることで、造形的な視点で未来や世界を語り合うきっかけができるでしょう。このドアによって、テロや紛争の起きない、多様性を受容する文化的成熟社会の構築が目指されるよう切に願い、未来を開拓する人材育成に希望を託します。